

先頃、ハワイ大学出版会から大冊の日本モダニズム翻訳集 *Modanizumu : Modernist Fiction from Japan 1913-1938*, Hawai i University Press, 2008 を出版した、ウィリアム・タイラー William J. Tyler さんは、源氏物語訳者の Royall Tyler さんよりは親子ほど年下だが、名うての日本語遣い、読み巧者の日本語訳者として知られる。続く大仕事は、諧謔と韜晦それに哄笑の戯作者として著名な、石川淳(1899-1987)の長編小説『荒魂』(1964)。右翼のコンツェルンの頭目たる怪物が国家転覆を成就する、破天荒なストーリー。変幻自在の話術と雅俗たち混じった放埒無類の文体。これをいかに英語に移すかが腕の見せ所。翻訳作業中間報告を受けての雑感を記す。

題名は苦心のすえ *The Bad Boy of the Gods* が提案された。かつて野口武彦が *The Enchaféd Hollowness* との訳を提案したというが、術学的すぎて一般読者には理解不能。フランス語なら *La Bête noire* が通り相場だが、もはや手垢が付き過ぎだろう。もとより日本語の「魂」には、キリスト教文化圏には馴染みにくい、やっかいな事情が控えている。英訳題案はヴァグナーの *Gotterdammerung* の余韻がやや臭い過ぎる。いっそのこと *Ara-tama* のままではいかなものか。写真家の Araki や大友克洋の Akira に stand-up comedy の Tamayo さんもすでに有名。タイラー訳により *aratama* という新語彙が英語に登録されれば儲けもの。副題か註に *The Bad Guys...* とでもすれば、女性超能力者たちを含む登場人物も包含されようという魂胆だ。単数の *the bad boy* で集合的に魂を総括できる、との鈴木貞美説は、カール・グスタフ・ユングの集合的無意識の図式を想起させ、かえって北米では御法度だろう。

主人公の佐太は出雲風土記に由来する、というのが渋澤龍彦『偏愛的作家論』の仮説だそうだが、この人物、父親に殺されたがために出生し得た、奇想天外な趣向となっている。「ただし、このおやぢ、もともと気のちいさいやつで、コロシなんぞといふすさまじい気合はみぢんも見られず」をタイラー試訳は *without a trace of the horrific speed and impassioned interaction one associates with cold-blooded murder* と敷衍する。とっさに思い出すのはリドリー・スコット監督の映画 *Black Rain* (1989)。コロシに必須の「気合」とは、小指を詰める段でヤクザ役の松田優作が見せる *horrificing intensity* であり、それは主演のマイケル・ダグラスには演じ得ない気魄だった。この気魄は魂魄の魄であり、これが「和魂(にぎたま)」とは対極の、所謂「荒ぶる魂」にほかならない。それは冷血 *cold blooded* などとは無縁な欲動の魂振りであり、その衝迫は、物理学的な *speed* や欧米語の *passion* とは一切無関係なはず。

すでにこの冒頭の細部から、英訳の困難さが浮彫となる。副主人公格の又彦と千鶴との SM プレイには「天啓は流血の歓喜の中に白化の本性をたたきだした」(全集 201 頁)とみえる。A revelation that severely tore at her derriere and whipped out of her any further pretense of lily whiteness. She has discovered her true self in the blood-splattered joys of having her bottom tanned. 英語として見事に奔放な訳しぶりだが、*lily whiteness* は聖母の無垢を連想させ、いかにも新約聖書的なイメージではあるまいか。Pretense は「白化」という不思議な語彙を、歌舞伎の「シラバケ」と取っての解釈らしい。True self もまた魂だろうが、こう訳されてみると、裂かれた肉体に滲む血の赤のなかから、肌の白さがひときわ鮮明に彩られ、嗜虐の地金が目に浮かぶ。さらには国芳や芳年の末期浮世絵の趣向さながらの、血まみれの白骨死体の「本性」まで透けて見えるかのようだ。

石川の『荒魂』の翌年、同世代の井伏鱒二(1898-1993)は『黒い雨』を公刊し、ただちに英訳された(*Black Rain*, John Bester 訳, 1966)。『黒い雨』は世界文学に仲間入りしたが、『荒魂』ではとても英語にはなるまい、というのが通り相場だった。その井伏は、ヒュー・ロフティングのドリトル先生ものに登場する双頭の動物 pushmi-pullyu に「オシツオサレツ」なる和名を与えている。あらたな「世界文学」を提唱する David Damrosch は、*What is World Literature*(Princeton. U.P, 2003)で、あい反する方向に引き裂かれつつ進もうとするこの架空獣の姿に、翻訳文学の提要をみようとした。両立多難なるオシツオサレツの葛藤のなかに『荒魂』の英訳がどんな魂魄を宿し、憑依を遂げるか、楽しみである。

* 討論の機会を提供されたタイラー先生に謝意を表す。